

*Jane Eyre*と‘female mission’

田村真奈美

序

1841年、*Westminster Review*に掲載されたある記事に次のような記述が見られる。

It is evident, from the number of works that have recently appeared entitled, or addressed to ‘woman’ that the situation of women, is at this moment, a matter of interest and discussion, especially to themselves. ¹

実際1830年代、40年代には、女性の義務や役割についての議論が盛んに行なわれていたようだ。中流階級の女性はどうあるべきかについて書かれた手引書(conduct books)が版を重ね、「女性の使命」(female mission)なるものがさまざまな立場から語られた。1839年に出版されたSarah Lewisによるコンダクト・ブックはその名も*Woman’s Mission*といい、1854年には17版が出るほどの反響を呼んでいる。²

この時代にはまた、18世紀末からの福音主義運動の高まりのなかで海外宣教活動(foreign mission)の必要性が認識されるようになり、国教会派・非国教会派の宣教会が次々と生まれていた。英国民の海外宣教への関心も高かった、とAnna Johnstonは説明する。

Public interest in missionaries was intense, particularly in the early nineteenth century, with many missionaries on furlough (or in retirement) undertaking extensive speaking tours; publishing a wide range of best-selling memoirs, histories, and other testimonies; and contributing to popular journals and newspapers. (Johnston 19)

後述するようにこのforeign missionはコンダクト・ブックの説いたfemale

missionと深く関わっているのだが、このようにさまざまなコンテキストのなかでmissionという概念が広く関心を呼んでいた時代に、Charlotte Brontëの*Jane Eyre* (1847)は書かれた。そしてこの小説の中でもヒロインは自らが果たすべきmissionを模索している。本稿では『ジェイン・エア』におけるfemale missionの問題を時代のコンテキストのなかで考察してゆく。その上で、一見時代の要請に沿うかのようにfemale missionを果たそうとするヒロインを描く『ジェイン・エア』のテキストが、実は同時にそのfemale missionの概念を裏切っているということを指摘したい。

I

そもそもコンダクト・ブックの提唱したfemale missionとは何だったのか。*Woman's Mission*は、女性の使命は「男性を道徳的に再生させること」(the moral regeneration of mankind)と説く。女性は男性より道徳的に優れているという、この時代のコンダクト・ブックに共通する前提に立ち、功利主義に支配される社会を生きる男たちのモラルを救うことこそ女性の使命であり、それは主に家庭の中で母親から子どもへの道徳教育を通じて行なわれるというのである。³ *Women's Mission*と同じ1839年に出版され、同じように版を重ねた*The Women of England*の著者Mrs. Ellisもまた、執筆の意図を‘warning the women of England back to their domestic duties, in order that they may become better wives, more useful daughters, and mothers, who by their example shall bequeath a rich inheritance to those who follow in their steps’ (*The Women of England* 39)とし、女性の領分はあくまで家庭であり、良き妻、娘、母として家庭の義務を果たすことで女性は社会に貢献できるのだと言う。コンダクト・ブックの説くfemale missionはdomestic missionなのである。

それでは『ジェイン・エア』においてこの女性の使命の問題はどのように扱われているのだろうか。もともとジェイン・エアは気性の激しい、反抗的な子どもだった。ジェインに手を焼いたMrs. Reedは、彼女をLowoodの寄宿学校へ送ることにするが、その際校長のBrocklehurstに‘I should wish her to be brought up in a manner suiting her prospects ... to be made useful, to be kept humble’ (36)⁴と希望を述べている。リード夫人のこの希望は叶えられる。口

ーウッド校で8年間過ごしたジェインは、Miss Templeをロールモデルに、すっかり変貌を遂げるのである。‘I had given in allegiance to duty and order; I was quiet; I believed I was content: to the eyes of others, usually even to my own, I appeared a disciplined and subdued character.’ (99)しかし、ミス・テンブルが結婚のために学校を去ると、ジェインはローウッドでの生活を息苦しく感じ、外の世界を見たいと渴望する。初めは「自由」を求め、が、「自由」は響きが甘過ぎて現実のものという気がしなかったジェインは、「では少なくとも新たな隷属(a new servitude)を与えたまえ！」(101)と祈る。ここから彼女のmissionを探す旅が始まる。初めに与えられた奉仕先⁵はThornfield邸で、ジェインはその邸の家庭教師になる。悩みを抱えている様子の、気難しい邸の主人Rochesterを前に、ジェインは、彼の悲しみを和らげたい、役に立ちたいと願う。しかし、ソーンフィールドに彼女の真のmissionはなかった。役に立ちたいというジェインの気持ちを、ロチェスターは自己本位な目的のために利用しようとしたからである。

ソーンフィールドから逃げ出してたどり着いたMarsh Endでは、国教会司祭で、のちに従兄とわかるSt. John Riversに、インドへの宣教(mission)の旅に妻として同行することを求められる。これは文字通り彼女のmissionとなりえたはずだが、ジェインはこれを断り、結局ロチェスターのもとへ向かう。しかし、これによってジェインのmission探しが放棄されたわけではない。最終的にジェインはロチェスターとの生活に自らのmissionを見出すのである。⁶

ロチェスターとの結婚がロマンティック・ラブの成就であることは間違いないが、同時にFerndeanでのジェインはコンダクト・ブックが説くfemale missionの実践者ともなっている。再会したロチェスターは家屋敷を失い、身体に障害を負い、孤独で不幸にうちひしがれていた。ジェインは一人で生きていられない彼を支え、慰めていこうと決心する。

“I will be your neighbour, your nurse, your housekeeper. I find you lonely: I will be your companion — to read to you, to walk with you, to sit with you, to wait on you, to be eyes and hands to you. Cease to look so melancholy, my dear Master; you shall not be left desolate, so long as I live.” (556)

このように病人の世話をすること、周囲の人間の幸福のために尽くすことは、コンダクト・ブックの奨励する大切な女性のmissionなのである。

また、ジェインはいわゆるmoral influenceも発揮し、ロチェスターを道徳的に「再生」させている。かつてロチェスターは、自分の不幸な運命を呪い、ジェインとの重婚を企て、神に挑もうとした。しかし、ファーンデーで再会した彼は、「今では悔い改め、神に祈りを捧げるようになった」とジェインに語る。ソーンフィールドでジェインがロチェスターの誘惑を退けたことが、結果的に彼を再び信仰に目覚めさせることになったのである。真相を知ったジェインが彼のもとから去り、屋敷の火事という惨事に身舞われ、視力と片腕を失ってようやく、ロチェスターは神の力を思い知った。そして悔い改めた彼のもとにジェインが戻ってきたとき、彼は「恵み深い神への感謝の念でいっぱいだ」と言い、さらに「これからはもっと清い生活(a purer life)を送りたい」(573)と願うのである。

こうして、ジェインはロチェスターの希望となり、よき導き手となり、また、目となり腕となる。エリス夫人は英国の女性たちに‘useful’であれ、と説いている(*The Women of England* 38-44)が、ジェインはまさにusefulな妻のかがみである。実際、ジェイン自身、“I love you better now, when I can really be *useful* to you” (570, italics mine)とロチェスターに言っている。こうしてみると彼女が最終的に選択したロチェスターとの生活は、コンダクト・ブックが説いていた、家庭という私的な場での mission、つまり domestic missionの実践になっていると言っていいだろう。

II

ところで、ジェインにはもう一つ、セント・ジョン・リヴァーズと結婚してインドへ宣教の旅に出る、という選択肢もあった。結局ジェインはこの道を選ばなかったのだが、自伝の最後を海外宣教師となったセント・ジョンについての報告で締め括っているということが、この宣教の旅という選択肢をジェインが重く捉えていたことを示唆していると思われる。海外宣教つまりforeign missionが彼女のmissionとなっていたかもしれないのであ

る。

当時の宣教師はほとんどが男性で、未婚の女性が単独で宣教師として海外に派遣されるようになるのは19世紀後半になってからのことだった。それゆえ『ジェイン・エア』が書かれた1840年代には女性宣教師はほとんどいなかったのだが、妻、あるいは姉妹として宣教師に同行した女性たちは存在し、彼女らは派遣先では宣教師である夫、兄弟の仕事を助け、現地の少女たちのための学校を監督・運営したり、聖書講読のクラスを開くなど、宣教活動にも参加していた。セント・ジョンがジェインに望んでいたのもそのような役割だったと思われる。宣教師の妻としての適性を見るために、彼はジェインにさまざまな経験をさせたが、そのうちの一つに Morton の学校で村の貧しい子どもたちを教える、というものがある。教えるといっても編み物、裁縫、読み書きと簡単な計算がせいぜいで、ジェインは品位を落としたと感じるが、結局はこの仕事をうまくやってのけ、セント・ジョンを喜ばせている。また、彼はジェインにヒンディー語を勉強させるが、宣教師の妻や姉妹たちにとって派遣先の言葉を学ぶことは必須だった。宣教師の妻たちの伝記には、苦勞しながら現地語の学習をする姿が必ず描かれている。この場合も、ジェインはセント・ジョンを喜ばせるために気の向かない勉強に取り組み、進歩を見せて、彼を満足させる。セント・ジョンについて、シャーロット・ブロンテは実在の宣教師 Henry Martyn をモデルにしたということが指摘されている⁷が、宣教師の妻たちの仕事についても知識があったようだ。

19世紀には宣教師の伝記がベストセラーとなることもあり、宣教先で立派に義務を果たす女性たちを描いた伝記も数多く出ていた。彼女らの伝記の多くは聖職者によって書かれ、女性宣教師や宣教師の妻たちを模範的なクリスチャンの女性の美德を備えた存在として称えつつ、宣教の旅に出たいと思う女性を増やそうという意図を持っている。例えば、Wesley 派の牧師 John Telford は *Women in the Mission Field* において、自身宣教師として派遣された女性たちのほかに、何人かの宣教師の妻たちの生涯も描いた。

Whatever tribute we may pay to the missionaries who have gone forth to labour among the heathen must be shared by the noble band of women who have stood

at their side, sharers of their peril and success. Many a precious life would have been sacrificed had there not been the loving care of home for those who were daily exposed to privation and disease, whilst cannibals and savages would have missed the most alluring illustrations of the new religion in the homes of its teachers and witnesses. (Telford 9-10)

この引用にも見られるように、彼女らの第一の仕事は「愛情を込めて家庭を守る」ことであり、宣教活動に参加するにしても「家庭の仕事が許さかぎり」(As long as domestic affairs would allow) (Telford 15)でのことだった。宣教師の妻たちのさまざまな活動が描かれるときには、「それでも家庭をおろそかにすることは決してなかった」ということが必ず強調されるのである。このように海外宣教 (foreign mission) は、女性が行う場合、domestic missionの延長線上にあると考えられる。実際にはdomestic missionの範囲を超えたところで大いに能力を発揮していた妻たちもいたし、宣教活動に身を投じるために宣教師として派遣される男性を探して結婚してまで夢を叶えた女性もいた。しかし、公には彼女たちはあくまで夫の活動を支える「協力者/妻」(help-meet) (513) だった。また引用したテelfordの言葉の最後にもあったが、彼女たちは、英国の良きクリスチヤンの家庭を異教徒たちの前に体現してみせる、という役割を果たしてもいた。本国で求められたdomestic missionを、異国でもより一層強調されたかたちで求められたのである。⁸

とはいえ、派遣先では家庭の外に出て夫の活動を手伝うことも求められた。先に述べた現地の少女たちのための学校の運営、孤児や病人の世話などいわゆる女性にふさわしい仕事のほかにも、パンフレットや祈祷書の翻訳なども夫とともにに行っていた。また、夫の留守中は伝道所 (station) の監督を任されることもあった。さらに、多くの場合気候条件は厳しく、危険な目に遭うこともあったのだから、肉体的にも精神的にも強くなければならず、行動力、決断力など、女性らしいとは考えられていなかった能力も必要だった。セント・ジョンもジェインのなかに‘docile, diligent, faithful’ (515) など一般に理想の女性に帰される性質のほかにも、‘energetic’ (479), ‘courageous, heroic’ (515) といったところも見出したがために、宣教師の妻

にふさわしいと見込んだのだった。このように foreign missionはdomestic missionの延長線上にはあるのだが、domestic missionで求められる以上の能力を発揮する機会を女性に与え、女性の活動の場を広げたのである。⁹それではなぜ、ジェインは海外宣教を自らのmissionとして選ばなかったのだろうか。

ジェインはforeign missionそのものを拒んだわけではない。ジェインがインドへの宣教の旅を拒んだ直接の理由は、セント・ジョンに妻として同行するように求められたことだった。セント・ジョンにとってジェインとの結婚は神への奉仕のための手段に過ぎず、ジェインも彼に対して尊敬以上の感情は抱いていない。愛のない結婚はできないと考えるジェインは “I freely consent to go with you as your fellow-missionary; but not as your wife” (521)と言っている。しかし、それだけが理由ではないだろう。これから見ていくように、ジェインはセント・ジョンのmissionの捉え方に違和感を持っていたのである。

セント・ジョン自身が認めているように、彼の目的 すなわち宣教師として神に奉仕するということは彼の野心を満足させるものだった。彼は村の平凡な司祭の仕事に満足できなかったのである。そのような先の希望の見えない日々のなかで悩みもがいていた時に「神の召命を聞いた」(my powers heard a call from heaven) (462)と彼はジェインに説明する。

Marianne Thormählen は、このセント・ジョンの発言を取り上げて、彼が神の召命を心(heart)で受けたのではなく知力(powers)で知覚した、と言っていることを問題視してこう述べている。

It was thus St John's *powers* that received a summons, not his *heart*. His adoption of a missionary's calling was the outcome of a yearning to employ his faculties in a way that would satisfy his avid ambition; it was not the result of an ardent wish to transform the lives of other troubled and restless souls by bringing them the comfort of the Gospel. (Thormählen 208)

しかし、セント・ジョンはただ世俗的な野心を満足させるためだけに宣教師になろうとしたわけではない。彼は宣教を ‘bettering their race’, ‘carrying

knowledge into the realms of ignorance’, ‘substituting peace for war – freedom for bondage – religion for superstition – the hope of heaven for the fear of hell’ (477) と説明し、この仕事を神聖なものと信じて使命感に燃えている。とはいえ、トルメーレンの言う、「福音の慰めを人々の悩める魂に与える」というのはやや趣が異なる。

ジェインは、そもそもセント・ジョンのクリスチャンとしての行動には愛が欠けているのではないかと疑っていた。彼はたとえどんな悪天候の日でも、教区の貧しい人々や病人のもとを訪れるのを欠かしたことはなかったが、語り手はそのような彼の仕事ぶりを ‘his mission of love, or duty – I scarcely know in which light he regarded it’ (448) 「愛に基づくものかそれとも義務感からなのか、彼がどちらのほうからその仕事をとらえていたのかよく分からない」と皮肉めいた調子で解説している。キリスト教の mission は ‘love’ と ‘duty’ の両方に基づくものであるべきだが、セント・ジョンの捉え方はどうも ‘duty’ に偏っているようなのである。¹⁰

ジェインがセント・ジョンを大理石の柱に譬え、厳しく冷たい人間だと感じたり、彼の説教を聞いて、畏怖の念は感じて魂が慰められることがないと思うのも、彼が司祭としての mission を果たす際に、そこに当然あるべき ‘love’ がいないからなのである。そしてそのようなセント・ジョンの宣教活動は ‘mission of love and duty’ とはならないだろう。¹¹ ジェインがセント・ジョンの申し出を断ったのは、セント・ジョンの mission の捉え方を危ぶんでいたからではないだろうか。

ジェインはセント・ジョンにこうも言っている。 “Moreover, before I definitely resolve on quitting England, I will know for certain, whether I cannot be of greater use by remaining in it than by leaving it.” (528) このときジェインの念頭にあるのはロチェスターのいまだわからぬ消息をたずねることである。彼女は自分がロチェスターのもとを去ったことで、彼が自暴自棄になって墮落してしまうことを恐れている。「イングランドに留まったほうが役に立てる」というのは、自分なら精神的な墮落からロチェスターを救えるかもしれない、ということであろう。そしてこれこそ自分の ‘mission of love and duty’ だと感じたからこそ、ジェインはロチェスターのもとに戻ったのであり、結果的に foreign mission ではなく、より活動の場が制限される domestic

missionが彼女の果たすべきmissionとなったのである。

III

コンダクト・ブックは、女性が国家に貢献できるのは domestic mission を通じてである、と説いたが、そのように女性の使命感を鼓舞しながら同時に彼女らの活動の場を家庭という狭い領域に限定していった。¹²また、「道徳的再生の場」である家庭は、英国の帝国主義を支えるイデオロギーにおいても前面に押し出される。「それ以前の単なる領土の征服という形態とは異なり、近代の植民地主義は植民地に文明化された社会をもたらそうという道徳的規範に導かれている」(Sharpe 6-7)が、その際、英国の道徳的優位性を示す役割を担ったのが「家庭」であった。英国の帝国主義的拡大において宣教活動の担った役割は大きい¹³が、拡大していく帝国の最前線で宣教教師の妻たちに求められた domestic mission については既に見た通りである。

コンダクト・ブックによれば、家庭において女性が道徳的影響力を持ちうるのは「愛」を通じて、それも「母性愛」(motherly love)あるいは「兄弟に対する姉妹のような愛」(sisterly love)を通じて、である。つまり domestic mission で求められていることは「『愛する』ことにほかならない」(川本 67)のである。川本静子氏は *The Daughters of England* の中でエリス夫人が ‘To love, is woman’s nature’, ‘To love, is woman’s duty’ (*The Daughters of England* 8) と述べている箇所を取り上げてこう説明する。

ここで女の「本性」と「義務」が一つに融合されているわけだが、これは(エリス夫人が代弁する)男の欲望の現われではなかろうか。つまり、女が「愛する存在」であることを望む男の欲望が、「本性」と「義務」の二重の「たが」を女のまわりにはめているのである。これによれば、女は本性からいっても義務からいっても「愛する存在」ということになる。女が「愛する存在」であることを望む男の欲望はそれほど強いのである。

なぜなら、商業主義の蔓延する時代において、激しい生存競争の闘いに巻き込まれざるを得ない男は、女の愛と慰めをぜひとも必要とするの

だ。市場や取引所などマモンの神の支配する職場で男は終始敵に囲まれ、ときには人を蹴落とし、ときには利己的行為に走らざるを得ないとすれば、そうした男の傷ついた良心を癒し、墮落した精神を高める仕事を女にぜひともやってもらわねばならないのである。(川本 68)

既に見たようにジェインが選んだmissionは愛することであり、従ってプロット上では彼女は時代の求めるfemale missionを果たすヒロインということになる。

しかし、『ジェイン・エア』のテキストの最後の二章に描き出される、ファーンディーンでのジェインのロチェスターに対する愛は、コンダクト・ブックが賞揚するmotherly loveあるいはsisterly loveとみなせるだろうか。確かにジェインはロチェスターに対して奉仕しようとしているし、自らそれを奉仕だと言っている。しかしその一方で、この最後の二章ではジェインとロチェスターの身体の接触が最も多く描かれていることが気になる。もちろん一つにはロチェスターが介助を必要とするからなのだが、それだけでは説明がつかないほど二人はお互いに触れあっている。既にファーンディーンに到着した時点で、ロチェスターの哀れな姿を離れたところから目撃したジェインは、すぐにでも彼の額に、そして固く閉じられたまぶたにキスしたい、と思っている。(552)さらにその翌日、朝食を済ませた二人はじめじめした林を抜けて明るい野原へ出かけるが、そこで乾いた木の切り株に腰を下ろしたロチェスターは早速ジェインを膝の上に座らせる。ジェインはそれを拒むどころか、こう言うのである。‘...nor did I refuse to let him, when seated, place me on his knee: why should I, when both he and I were happier near than apart?’ (563)まだロチェスターがジェインに二度目の結婚の申し込みをする前だということを考えると、ジェインの行動、そしてこの発言は非常に大胆なものだと言える。さらに、目が見えないロチェスターがジェインの存在を確かめるためには彼女に触れなければならない、という設定もこのファーンディーンの章に官能的なものを感じさせることにつながっている。例えばジェインとロチェスターが再会した場面を見てみたい。

He groped: I arrested his wandering hand, and prisoned it in both mine.

“Her very fingers!” he cried; “her small, slight fingers! If so, there must be more of her.”

The muscular hand broke from my custody; my arm was seized, my shoulder – neck – waist – I was entwined and gathered to him.

“Is it Jane? *What* is it? This is her shape – this is her size –” (555)

この場面に感じられる官能性は、果樹園の場面について Ellen Moers が言っているのと同じように、同時代の読者ならば love ではなく passion という言葉で言い表したものであろう。¹⁴このようにファーンディーンでのジェインの ‘mission of love and duty’ は、当時盛んに賞揚されていた female mission とはかなり異質なものと云わざるをえない。

結 論

『ジェイン・エア』は female mission なるものが盛んに論じられた時代に書かれ、自らの mission を模索するヒロインは最終的に家庭の中にそれを見いだした。このことから「ジェインは妻、母として生きることこそが女性の聖なる使命であるという文化的ノームの枠を逸脱することはない」(市川 98-9) という見方ができる。

しかし一方で、『ジェイン・エア』に対する出版直後の書評のなかにはしばしば「女らしくない」とか「女性が書いたものとは到底思えない」という言葉が含まれていた。例えば『ジェイン・エア』の酷評としてよく知られる *Christian Remembrancer* の匿名の書評には ‘unfeminine’, ‘coarseness’, ‘selfishness’ などという言葉が並び、¹⁵ また Elizabeth Rigby は *Quarterly Review* に寄せた書評の中で、女主人公ジェインは ‘the personification of an unregenerate and undisciplined spirit’ であると述べている。¹⁶ いずれも、使命感に駆られたヒロインが紆余曲折を経て、最後には家庭の中に自らが果たすべき使命を見出す、というこの小説のプロットが生み出した反応ではない。なぜ、このような反応が生じたのか。それは、『ジェイン・エア』のテキストそれ自体がこのプロットを裏切っているからである。テキストには

プロットとは馴染まないものが織り込まれており、これら評者はそこに反応したのだ。彼らが感じ取ったのは、プロットを裏切るかのようにテキストの中に織り込まれたものの存在であり、ファーンディーンの場合に特に顕著な、当時のいわゆるfemale missionとの違和感なのである。

川本氏は先の引用のなかで、「愛することは女性の本性であり義務」というのは男の欲望の現れであり、エリス夫人がそれを代弁している、と述べていた。¹⁷ それに対して『ジェイン・エア』のテキストは、女性のmissionは愛すること、というコンダクト・ブックが広めたステレオタイプの概念を裏付けるようなプロットを持ちながら、同時にその概念を覆す可能性を秘めたものをも表している。『ジェイン・エア』のテキストに織り込まれたもの、それはfemale missionという概念が封じ込めていたはずの「女性の欲望」なのである。

*本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第4回大会（2004年11月20日、於甲南大学）における口頭発表原稿に加筆・修正を施したものである。

註

1. [Margaret Mylne], “Woman, and Her Social Position.” *Westminster Review*, 35 (1841), 24, quoted in Helsing, et al. 4-5.
2. Cf. Helsing, et al. 126, n. 3.
3. 以上 *Woman’s Mission* からの引用はすべて次の書による。Helsing, et al. 6-8.
4. Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (Oxford: Clarendon Press, 1969). 以後、本書からの引用は頁数を括弧内に示す。
5. ‘mission’ とは本来「与えられるもの」であるため、ジェインの前に提示されるmissionも常に人智を超えたなものかによってもたらされたように描かれている。例えば、ソーンフィールドへ行くことになったのはジェインが家庭教師として新聞に広告を出したからなのだが、このアイデアは「妖精がもたらしてくれたものに違いない」とテキストにはある。(102)
6. ジェインはロチェスターからの不思議な‘summon’ (539)を受けて、セント・ジョンの申し出を断り、ロチェスターの消息を尋ねに行く。ここでもmissionは人智を超えたなものかによってもたらされたことになる。さらにこの声がジェインにもたらした影響は、新約聖書の使徒列伝においてパウロとシラスが捕えられていた牢獄の扉を開けた大地震 (Acts 16:24-26) に譬えられているが、この声こそ彼女に真のmissionをもたらすもの、ということを示すためかもしれない。
7. 例えば Wise & Symington vol. 1, 172; Winnifrith 31, 230; Thormälén 214-7.
8. Cf. Johnston 20-1, 45-6.

9. 女性宣教師や宣教師の妻たちの果たした役割の両義性については、Johnston, 48-9.
10. Jerome Beatyは‘His [St. John’s] path to salvation lies through self-denial, self-sacrifice, martyrdom. His is the life of *agape*. Jane’s way to salvation – as the leadings and her experience and Rochester’s indicate – lies through everyday, domestic life, the life of *eros*.’ (Beaty 210)と述べ、セント・ジョンにとっての「愛」は「アガペ(神の愛/神への愛)」なのであって、彼に「愛」がないわけではないとしている。しかし、「愛に基づくものかそれとも義務感からなのか」という語り手の言葉の中の「愛」は明らかに「アガペ」を指している(アガペは隣人愛、同胞愛をも含む)。したがって、セント・ジョンには「エロス」はもちろん「アガペ」を意味する‘love’も欠けているのではないのだろうか。少なくとも語り手はそう考えているだろう。(「キリスト教における愛」「アガペ」「エロス」については『岩波キリスト教辞典』を参照した。)
11. セント・ジョンは良き家庭人になりそうにない(“Well may he eschew the calm of domestic life; it is not his element”) (502)とある点にも注意すべきだろう。宣教師の妻の役割が異邦において英国家庭の道徳的優位性を示してみせることだったことを考えると、夫がdomestic lifeに価値を見出さないというのは問題である。
12. Cf. Helsing, et al. 5.
13. Cf. Johnston 13.
14. Cf. Moers 141-2.
15. From an unsigned review, *Christian Remembrancer*, April 1848, xv, 396-409, reprinted in Allot 88-92.
16. Elizabeth Rigby, from an unsigned review, *Quarterly Review*, December 1848, lxxxiv, 153-85, reprinted in Allot 105-112.
17. Nancy ArmstrongとLeonard Tennenhouseも、‘conduct books for women, in particular, strive to reproduce, if not always to revise, the culturally approved forms of desire’ と述べ、その直後に ‘cultures systematically designate a certain kind of woman as the object of desire’ と続けて、つまり コンダクト・ブックが再生産しようとしているのは「男性の欲望」であることを示している。 Armstrong & Tennenhouse 1.

参考文献

- Allot, Miriam, ed. *The Brontës: The Critical Heritage*. Rpt. Edition. London & New York: Routledge, 1995.
- Armstrong, Nancy, and Leonard Tennenhouse, eds. *The Ideology of Conduct: Essays in Literature and the History of Sexuality*. New York & London: Methuen, 1987.
- Beaty, Jerome. *Misreading Jane Eyre*. Columbus: Ohio State University Press, 1996.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Oxford: Clarendon Press, 1969.
- Clark, Robert. *The Missions of the Church Missionary Society and the Church of England Zenana Missionary Society in the Punjab and Sindh*. London: Church Missionary Society, 1904.

- Cunningham, Valentine. "'God and Nature Intended You for a Missionary's Wife': Mary Hill, Jane Eyre and Other Missionary Women in the 1840s." *Women and Missions: Past and Present*. Eds. Fiona Bowie, Deborah Kirkwood, and Shirley Ardener. Providence & Oxford: Berg Publishers, 1993. 85-105.
- Ellis, Sarah Stickney. *The Women of England, Their Social Duties, and Domestic Habits*. 11th edition. London: Fisher, Son, & Co., n.d.
- . *The Daughters of England, Their Position in Society, Character, and Responsibilities*. Uniform Edition. New York: Edward Walker, n.d.
- Gill, Sean. *Women and the Church of England: From the Eighteenth Century to the Present*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1994.
- . "Heroines of Missionary Adventure: The Portrayal of Victorian Women Missionaries in Popular Fiction and Biography." *Women of Faith in Victorian Culture: Reassessing the Angel in the House*. Eds. Anne Hogan, and Andrew Bradstock. London: Macmillan, 1998. 172-185.
- Helsing, Elizabeth K., Robin Lauterbach Sheets, and William Veeder. *The Woman Question: Defining Voices, 1837-1883*. New York: Garland Publishing, Inc., 1983. Vol. 1 of *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America, 1837-1883*. 3 vols.
- . *The Holy Bible, King James Version* (NY: Meridian, 1974).
- Hoeveler, Diane Long, and Beth Lau, eds. *Approaches to Teaching Brontë's Jane Eyre*. New York: The Modern Language Association of America, 1993.
- Jay, Elizabeth. *The Religion of the Heart: Anglican Evangelicalism and the Nineteenth Century Novel*. Oxford: Clarendon Press, 1979.
- Johnston, Anna. *Missionary Writing and Empire, 1800-1860*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Lovett, Richard. *The History of the London Missionary Society, 1795-1895*. 2 vols. London: Henry Frowde, 1899.
- Moers, Ellen. *Literary Women*. New York: Doubleday & Co., 1976.
- Sargent, John. *A Memoir of the Rev. Henry Martyn, B. D.* First American Edition. Boston: Perkins & Marvin, 1831.
- Sharpe, Jenny. *Allegories of Empire: The Figure of Woman in the Colonial Text*. Minneapolis & London: University of Minnesota Press, 1993.
- Telford, John. *Women in the Mission Field: Glimpses of Christian Women among the Heathen*. London: C. H. Kelly, 1895.
- Thormälen, Marianne. *The Brontës and Religion*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Winnifrieth, Tom. *The Brontës and their Background: Romance and Reality*. 2nd edition. London: Macmillan, 1988.
- Wise, T.J. & J. A. Symington, eds. *The Brontës: Their Lives, Friendships & Correspondence*. 4 vols. Oxford; Shakespeare Head Press, 1933, rpt. in 2 vols. Philadelphia, Pennsylvania: Porcupine Press, 1980.
- 青山誠子 『ブロンテ姉妹 女性作家たちの十九世紀』朝日新聞社、1995年。
- 市川千恵子 『『レディー』としての戦略 『ジェイン・エア』とコンダクト・ブック』『英文学研究』第79巻第2号、2002年。
- 大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃編 『岩波キリスト教辞典』岩波書店、

2002年。

川本静子 「清く正しく美しく 手引書の中の<家庭の天使>像」 松村昌家、川本静子、長島伸一、村岡健次編『女王陛下の時代』英国文化の世紀3 研究社出版、1996年。

小嶋潤 『イギリス教会史』刀水書房、1988年。

(豊橋技術科学大学講師)

them.

Unveiling the surroundings of adjudicators in those days, hence the state of military bandmen, leads the exposure that the reformation of their disgraceful music had been contemporarily urged to themselves as the result of Crimean War (1854-56). The explications of the root causes offered, the followings are discussed: how their innovation was affected and related with the drastic expansion of the brass band movement; and what social impact there was felt in that respect.

Considering the two contemporary musical movements in parallel, it can be concluded that the nature of “popularity of Crimean War” inspired enthusiasm for brass band movement along with revealing the shifting view of music. This brings further a new light to the fact that the relationship between war and music was rearranged in the mid-Victorian period.

Jane Eyre and the Female Mission

Manami Tamura

Jane Eyre was written in the period when popular conduct books for middle-class women discussed the so-called ‘female mission’. This is also the period when the foreign mission began to be taken seriously during the evangelical movement in the Church of England. In this context, Jane’s life can be seen as a journey in search of her own mission. First, at Thornfield, her wish to serve her master takes on unfortunate turn and she barely escapes. Then, at Marsh End, she is offered another choice of mission by her cleric cousin St. John Rivers. It is the mission of spreading the Gospel in India. The fact that Jane does not accept it does not mean that she disapproves of the foreign mission itself. The problem for her is that she has to get married to St. John in order to be sent on the mission. St. John does not love her, nor does she love him. Furthermore, Jane thinks that his notion of mission lacks love as its basis, while, in her view, the most important basis of any mission should be love. In the end, she finds her mission in the married life with

Rochester at Ferndean where her help and support are indispensable for her disabled husband. Jane feels deep compassion and love toward Rochester and it is evident that she helped him out of spiritual crisis. All these facts are in accordance with what the conduct books of the 1830s and 1840s advocated. According to them, the female mission should be primarily a domestic mission and women should morally influence men through love. This notion of female mission came to acquire greater importance as domesticity became the symbol of the morally superior status of the nation. Jane Eyre should be a model case for female mission in these circumstances. However, the text of *Jane Eyre* betrays this plot. The last two chapters, where Jane's domestic mission is being carried out, show something that the notion of female mission would contain, something that could possibly subvert the ideology of domesticity. This subversive element woven into the text of *Jane Eyre* is 'female desire'.